

# 小説 「ストライキの夜」 上巻

駿唐地 恒抄

(あまみち) (しんてい)

## プロローグ

二〇〇×年 四月 日 午後三時三五分

桜の花が咲き乱れる様子は、毎年「今年も色々な事があるのかな」という気にさせてくれる。

出勤前のコーヒーを呑みながら柄にもない感慨にふけっていると、滅多にかかってくる事の無い彼の電話が、かいがいしく仕事を始めた。ベルの音に、現実を引き戻されながら、受話器を取り上げる。

声を聞くだけで胃が痛くなるような先輩の声が、いつもの感じとは少し違う。君づけで呼ばれるなんて、入社以来二度目だな！前回は確か俺の休みの日の朝、突然出勤してくれて頼まれたときだったような気がするな。先輩の次の言葉が聞こえるまでの一瞬の間に彼は考えを巡らせた。

「今日遅番だよな？」

「そうですね。メシ食って六時にはあがりませうけど・・・」

「うん。あのね、今日六時からストライキやるんだって。今、執行委員の中さんから電話あつてさ、お前と俺さ、遅番だから、六時五分くらい前に、一旦上上がったから、六時ジャストには仕事離れてB1の桜の間に集合だつてさ」

「本当ですか？」

「らしいよ」

「いやー本当にやるんすね」

「らしいよ」

「びっくりしますね、でも本当ですか？」

「お前もしつこいな、わざわざおめーの所電話して、こんな冗談言うか？アホー！」

「そりゃそつすね」

「とにかく、そーなんだよ。んでお前はこの前職場委員の金城が配つてた連絡網の次の奴・・えーつと、湯川だ。湯川に電話しとけよ」

「でも、細井さん、今日湯川休みですよ」

「知つてるよ。でもあいつ明日早番だから、まだスト続いてたらどーしていかわかんねーだろ。とにかく、電話してスト決行の事だけでも伝えとけよ。じゃーな」

「はい。失礼します」・・・

結局、いつもの口調じゃねーかよ。でも本当にやるんだな、そういうの

すげーな。この間、組合の人がボーナス低すぎるって言ってたもんな。いやーびっくりしたな。どーなんだろうなオレ、まいったなー。テレビとか出んのかな。オフクロに電話しとこつかな。オフクロ、左翼嫌いって言ってたからな。びっくりすんだろつな。・・・

「もしもし、オフクロ??あ。ごめん湯川、今、オフクロの事考えてたからさ」

「えっ?違うよばーか、マザコンじゃねーよ」

「え?寂しいんだろって?そりゃお前はいいよな彼女居て、どーせ俺はビデオでさあ・・・そんな事どーでもいいんだよ。実はな、今日六時からストなんだってさ」

「違うよ、私鉄がじゃなくて、うちだようち」

「お前、明日早番だろ。もし明日まで続いてたら、B1の桜の間に来りゃいいと思うよ」

「エッ?続いているかどうか俺が解るわけないじゃん。とにかく組合事務所に電話すりゃいいんじゃない」

「電話番号?スト連絡網に書いてあるよ」

「無くした?しょうがねーな、ちょっと待ってるよ。047-390-x

xだよ。書いた?」

「じゃーな、ヨロシク」

「アッ!ちよつと待って、連絡網で思い出した。次の奴、えーつと職場委員の金城さんだ。金城さんに連絡伝わったって電話してくれよ。じゃねーと、俺また細井さんに怒られたからさ、たのむよ。それじゃな」

「ところでお前今日デート?いいよなー。まあ頑張れよ」

「何をつて、あれだよあれ。あ~~~~」

桜見てたら、桜の間かあ・・・

別に意味の無い事であったが、彼には何か曰くありげに思えて仕方無かった。呟くと、同時に鍵をとりあげ、テレビを消し、玄関に向かった。

・・・アッ!靴下忘れる所だった。でもストでも黒靴下いるのかなあ?・・・

同日 午後五時四五分  
プラトン東京ベイ レストラン「ラ・メゾン」

「いらしゃいませー」

「あつー村山社長、今晚は。今日は社長誕生日ですよね。おめでとうござい  
ます」

「いやー、由子ちゃんありがとう。ところで久しぶりだね、元気？」

「はい、おかげさまで。今日は社長のご予約承ってましたので、ケーキ用意  
してあるんですよ」

「六〇にもなって誕生日ってのも何だか恥ずかしいが、いくつになってもう

れしい事はかわらんね。」

「ところでマネージャーは居る？」

「社長、いらっしゃいませ。奥様、今晚は」

「おお、太田マネージャー、忙しそうだね」

「はい、おかげさまで。還暦おめでとつございます」

「ありがとう。ところで、ちょっと太田君、顔色悪いぞ。大丈夫か」

「とんでもございません。元気すぎて困ってるくらいですよ。どうぞ、いつ  
ものお席ご用意出来てますので」

「はいはい、どうもね」

「ドンペリご用意してるんですが、とりあえず何か他の物お飲みになります  
か？」

「ドンペリでいいよ」

「かしこまりました」

いくら忙しくとも、お客様の誕生日には、スタッフの歌う《ハッピーバースデー》で、お祝いするのがこのレストランのサービスの一つである。いつも恥ずかしさは拭いきれないが、十何年もこの商売を続けている太田は、その仕事を完璧にこなした。ただし、音程は完璧とは言えないが。

・・・はっぴばーすでえーとぅーゆー、はっぴばーすでえーとぅーゆー、はっぴばーすでえーでいあしやちよおー、はっぴばーすでえーとぅーゆー・・・

「おめでとぅございまーす」

「いやー、ありがとぅありがとぅ」

「社長、今日はお誕生日という事で、シェフが特別メニューをアレンジさせてもらいました。前菜は、キャビア・ブルーガマラソールのカスピ海びちびち風でございます」

「うーん、やっぱりカスピ海もんはうまいな」

「有り難うございます。とぅございゆっくり」

午後五時五〇分

同ホテル、男子ロッカー

「ざあーすー!」

「な」

「飯、食いました?」

「食ってきたよ」

「俺もラーメン食って来ちゃいました。ところで細井さん、ストライキの話どうなってますかね?」

「うん、やつぱ、やるみたいよ。今、団体交渉決裂!って叫んでたからな」

「そうすか。本当にやるんすね」

「ほーんと、しつこいねお前。なに感動してんだよ」

「細井さん、びびって無いんですか？」  
「そんな事考えたって、仕方ねーだろ。とにかく早く着替えて上がってみようぜ」

午後五時五五分  
同、レストラン

「おはようございます」  
「おはよう」  
「もう、村山社長来てんの？」  
「とつくに来て、今、前菜食い終わる所だよ」  
「あっそう。ちょっと挨拶だけしてこようかな」  
「今晚は、社長いらっしやいます」  
「おー後藤君、今頃出勤？」

「社長出勤ってヤツですよ。だって、本物の社長より来るの遅いんですからねえ。．．．おもしろくないですか？」  
「相変わらず元気だけはいいねえ、後藤君は。でもあんまり面白くないよ」  
「こりゃまた、失礼いたしました。」  
「社長、すいません。ほんとこいつは軽口ばかり叩いて、仕事もろくにないクセに。後藤君、社長のスープ、早くお持ちして！」  
「はい。あっ社長、これ私達からのほんの気持ちのプレゼントです。」  
「そうかい、ありがとう。すまんね、いつも気を使わせて」  
「とんでもございません。どうぞごゆっくり」

午後五時五八分  
ラ・メゾン キッチン

「後藤！村山社長のスープ、トリュテュークレール・レディーカーズン玉手箱風、早くもってけ……」

## 二 恐縮の夕

午後六時〇四分  
同、レストラン

「マネージャー！私は、さっきからスープを待ってるんだけどもまだかね？私が待たされるの嫌いな事わかってるだろう」

「社長、申し訳ございません。ただ今お持ちいたします」

## 三 テンション

午後六時〇五分  
同ホテル、地下一階宴会場「桜の間」

……今更ながら思っても仕方無いが、自分はどつしてここに居るんだろう。ポーナス協定したり、賃上げ取ったり、みんなの為に組合は無くしては困るものだという事は解るし、中山先輩も執行委員（確か副委員長とか言ってたっけ）で頑張ってる姿見ると、ここまでやんなきゃ賃上げってないのかなんて思ってたけど、まさか自分がストライキに参加するなんて思ってもみなかった。それにしてもなんだ、なんだこのテンションあがってる人たちは……

さつき、細井と一緒にこの宴会場のドアを開けた時、そう彼は感じた。そして、二〇〇人はゆうに超えていると思える従業員（正確には組合員だが）のざわめきに圧倒されつつも、「F&B」と書かれた、プラカードを掲げ大声で整列させようとしている中山の近くへと進んで言った。

「おす！後藤」同期である中国料理「明朝」のウェイター、吉崎の声がした。

「おう、吉崎。今日遅番だったの？」

「違うよ中番。十時まで」

「あ、そう。ところで、このまえ貸したFMWのビデオかえしてよ」

「まだ見てねーんだよ。もちよっと貸しててよ。」

「まーだ見てねーの？大仁田のノーロープ有刺鉄線電流爆破地雷源デスマッチの話しようと思ってたのに、はやく見るよ！次、「カラセル」の前川に貸してくれって言われてんだよ」

「わーったよ。今日、帰ったら見るから、明日かあさってにはかえすよ」

「だつて今日ストだろ。帰れんのか？」

「えっ！帰れねーの？」

「知らねえけど、なんか帰れる雰囲気じゃねーじゃん」

「やべえ、マジー、俺、今日カノジヨんとこ行くなって電話したんだよ今朝」

「なんだよ、おめえ、帰ってビデオ見ると言っただじゃん」

「いーじゃねーかよ」……

その時、小さな演台の前で、スチュワードの大原が赤いメガホンを持って喋り始めた。

「おい、後藤。あの人、書記長だよな」

「シーツ、なんかシンとしてるから黙ってるよ」



『組合員の皆さん！我々執行部は、会社側に提出した要求を貫徹するため、七回にわたる団体交渉を重ねてきました。しかし、我々の妥結案　ヶ月に対し、会社側は、第五回の団体交渉で提示した一時金　ヶ月という低額回答から歩み寄って来ません。

サービズ業にとつて、要求貫徹の為のストライキはたいへん危険なものである事は十分理解しています。しかし、正当な利益配分をしない会社側に、我々の正当な要求を受け入れさせるには、最後の手段に訴えるしかありませんでした。本日も午後三時より団体交渉を持ちましたが、最終の妥結案として組合側から提示した　%ヶ月会社側には受け入れられず、「組合側がストライキにうったえるのなら、会社側は更にかたくなになる方向をとるしかない」と言うコメントで終始しました。我々も何とか全面ストライキだけは避けようと言う方向で交渉してきましたが、これ以上の妥協は、組合員の、ひいてはその家族の生活を破壊するものとなると判断し、執行委員長の発令により、本日四月　日午後六時より、全組合員による、二四時間全面ストライキに突入いたしました。長い

ストライキはそれ自体危険なものではありません。我々は、このストライキ中にも交渉を重ね妥結を図りますが、頑な会社の態度を崩す事は容易ではありません。しかし、決意はしています。組合員の皆さんの団結のもと、我々の要求を貫徹しようではありませんか。・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・それでは、ストライキ中に於ける組合員の行動の注意点及び、以後のスケジュールについて、闘争本部長の染田執行委員より説明があります。』

『組合員の皆さん、お疲れさまです。それでは、ストライキ中の注意点及び、以降の予定について説明いたします。・・・・・・・・・・・・・・・・』

「予定勤務時間が終わったら、自宅待機だってよ。帰っていいんじゃない」

「帰っていいけど、家にいなきゃいけねーんじゃないの。お前、彼女んとこ居たら連絡つかないじゃん」

「連絡網の前の奴が、解つてればいいんじゃないの？」  
「そんなもんかな？まあ俺はどうせ家に帰るしか無いけどね」  
「お前の言い方、最近愚痴っぽいんじゃない」  
「ほっとけ」

『……それでは、組合員の皆さん、これより執行部は再度、団体交渉に臨みます。皆さんは、しばらくここで待機して戴く事になりますが、この団体交渉でまたも交渉決裂の場合は、正面玄関前でピケをはる事になります。皆さんは今お配りしている、ストライキ時の注意事項と団体交渉経過報告に関する、教宣新聞を熟読して於いて下さい。』

「おい、ピケって何？」

「聞いてなかったのかよ」

「うん、ボーツとしてた。で？何」

「俺も聞いてなかった」

「なんじゃそりゃ。まあとにかく此処にいればいいんじゃないの？」

「んだな」

「それにしても、あの闘争本部長とか言う人、テンション高いねー」

「あの人って、メインキッチンだよ？あの人いつもテンション高いよ」

「そーなんだ」

#### 四 窮状

午後六時二四分

同、レストラン

「マナージャー！一体どうしたんだ。さっきのスープは冷めてるし、次の魚

料理は何分待たせるつもりなんだ。ラ・メゾンらしくないじゃないか。」

「社長、本当に申し訳ございません。」

「だから、どうしたんだ。東京湾に魚釣りに行ってるわけじゃないだろ」

「申し訳ございません。ただ今、すぐですのでもう少々だけお待ち下さい」

「おい、由子、社長のフレッシュオマールのア・ラ・ナージュ、はちきれそう風ア、バイエかけたんかよ！」

「はい、でもマネージャー私バイトですし、玄關しか見た事無いんですよ」

「仕方ねーだろ、スト本当に入られちゃったんだから」

「行くなつて、言えなかつたんですか？」

「バカかお前。そんな事言ったら不当労働行為だとかなんだとかで、俺がクビになつちやうんだよ。」

「そーなんだあ」

「ところでマネージャーさあ、この前、連れてつてくれるって言ってた、六

本木のおかまバーいつ行くの？」

「ダブルバカかお前！！それどこじゃねーだろ！とにかく仕事しろ」

「ヤッホー怒られちゃった」

「・・・」

午後六時四五分

「マネージャー、私はもういい加減頭に来た。帰るよ。全くバカにするにもほどがある。三〇分も待つて、魚料理出てきたはいいが、さっきスープ下げるとき、あの黒服着てる外人、何だか笑いながらフィッシュナイフまで下げちゃったじゃないか。私にこの海老、手で食えっていうのかい？ええ、手で」

「申し訳ございません、しゃちよーう」

「もういい。ところで後藤君はどこ行ったんだ。さっきのプレゼントの礼だけ言うから、此処につれて来なさい」

「申し訳ございません、しゃちよーううううう」

「なーんなんだ、それは。君はそれしか言えんのか。ええ！」

「実は、彼は、組合員でして、その、この、職場の、スタッフ、えーっと、ランク&ファイルって呼んでますけど、その、あの、黒服着てない、ほかの、その、スタッフなんですけど、黒服着てもランク&ファイルは居ますけど、その、あの、つまり、下のヤツら、春闘が、すとらいきで」

「なーに言っただかさっぱり解らんぞ」

「はい、つまり、その・・・」

「もういい、不愉快だ！帰る。もう来ないかもしれんぞ。毎年入れてやっとなる、うちの会社の宴会も、シャラリントンに持って行くかもしれんぞ」

「しゃちよーおおおおおお、実は、このホテルさっきから、ストライキ中なんですうううう」

上巻 完